

金剛坂遺跡のお墓事情（解説シート 2）

人は、同じところに住み続ける時に、初めて死者を葬るようになったと考えられています。狩りなどをして同じところに留まらない場合は死者はそのままにしておき、お墓を造る習慣があまりなかったようです。日本では縄文時代になるとお墓を造り、ある程度の定住をしたことがわかっています。それ以後、形や大きさの違った様々なお墓が造られるようになりました。お墓の形や大きさは貧富や権力の差もありますが、時代の移り変わりによるものも大きかったようです。日本で最も大きなお墓は大阪府にある大仙古墳で、全長は486mもあり、現在では考えられないほど大きなお墓です。

金剛坂遺跡にはこういった巨大なお墓はありませんが、発掘調査などで確認された弥生時代以降のお墓事情について紹介します。

弥生時代のお墓は遺跡の中央部で多く確認されています。右写真のお墓は木の棺に葬ったもので、同じようなものが2基確認されています。それぞれ、長さ70cmほどの鉄の刀と剣が供えられていました。当時、鉄の刀や剣はかなりの高級品ですので一般の人のお墓ではなく、集落の長のような人物のお墓ではないかと考えられます。

続く古墳時代のお墓は遺跡の南部で多く確認されており、多くは丸や四角の形をした径15mほどの古墳です。古墳は、墓を造る場所に盛土をした小山のようなもので、その上に人を葬りました。残念ながら、金剛坂遺跡で確認されたものは、すでに盛土の部分が削られていて古墳の周りを囲う溝しか残っておらず、墓穴もすでにありませんでした。ただ、周りの溝からは埴輪が見つかっており、古墳の大きさからもある程度の有力者のお墓であると考えられます。



鉄の剣が供えられていた木の棺跡



出土した鉄の剣



出土した鉄の刀



発掘調査で確認された古墳の跡

発掘調査では、その後の平安時代の墓も確認されています。この頃になると墓は小さくなり、木の棺に葬っただけのものになりますが、斎王や貴族が暮らしていた斎宮寮も近く、当時の高級品である緑釉陶器も供えられていたことからある程度の身分を持つ人物が葬られていたと考えられます。

また、発掘調査ではありませんが、墓石を多く建てるようになった江戸時代以降の歴史を探るのには、現在の金剛坂の墓地も欠かせません。墓地には300年以上前の墓石も多く残っており、江戸時代から続く歴史ある墓地ということがわかります。

このようにお墓事情を調べることは、当時の人がどのような暮らしをしていたか、どんな人だったのかを調べるために、とても重要なことです。



江戸時代の墓石も残る金剛坂墓地



埴輪って？

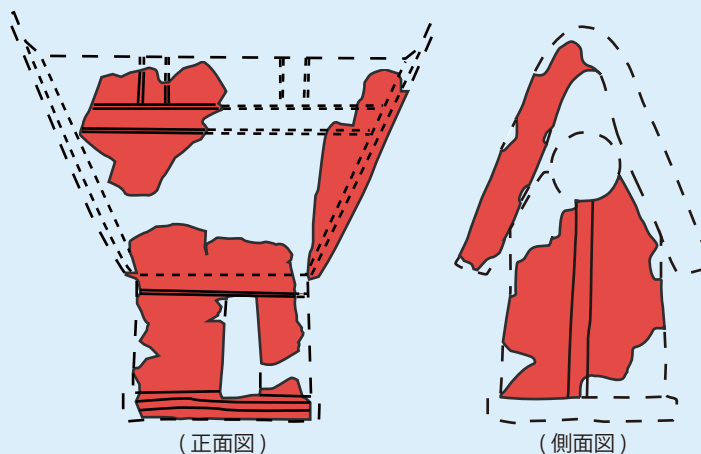
金剛坂遺跡の発掘調査で確認されている埴輪には円筒、朝顔、家、盾、甲冑など様々なものがあります。埴輪は、円筒埴輪のように古墳のまわりに立て並べて飾るものと、盾や人物、動物などを埴輪で表現して、何かの儀式を模しているものがあります。

また、埴輪からは当時の生活を垣間見ることもできます。家形埴輪は、死者の生前の家や来世での家を表現したと考えられており、当時の家がどのような形であったかを知る手がかりになります。金剛坂遺跡の家形埴輪で形がよくわかるものは2つあり、埴輪は2つとも切妻造りの屋根を持つ住居と考えられ、右の埴輪は正面に扉があるようです。また、側面には穴が開いており、建物の梁か、住居からの煙り出しを表現しているようです。

ただ、埴輪は実物より誇張して表現されることが多く、屋根などがかなり強調して造られています。



金剛坂遺跡出土の家形埴輪
(東京大学総合研究博物館所蔵)



(正面図)

(側面図)

金剛坂遺跡出土の家形埴輪(明和町所蔵)
出土した部分は赤色で表しています